



Title	指向性について(1) : チザム・テーゼの検討
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1979, 5, p. 1-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5928
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

指向性について(1)

——チザム・テーゼの検討——

菅 野 盾 樹

指向性について(1)

——チザム・テーゼの検討——

私たちが現にそうであるこの人間が、心の主、有情のものであることを、いったいだれが疑うだろうか。ところが、私たちが心を帯びること、時として重荷を運ぶかのようなのである。しばし立ちどまって荷を解いてみたいものだ、とだれしも願わずにはいられない。心とはなにか。心を木石から区別するものはなにか。この問へ、いくぶんなりとも探索の歩みを進ませるために、ここでは指向性概念を手掛りとしたい。心をめぐる議論、したがってまた、指向性をめぐる議論があまりにも多岐にわたっている状況が私たちを悩ませることはないだろう。私たちの困惑は、むしろ、論の錯雑を可能な景観としてもつはずの、理論的帆船がまだ私たちには与えられていない、ということなのである。

ブレンターノ・テーゼ

フランツ・ブレンターノは、心理現象が物理現象から区別される特異な点を、対象への関係が独特な様態をとることだと考えた。

あらゆる心理現象を特徴づけるものは、中世のスコラ哲学者たちのいわゆる対象の指向的(または心的)内存在 *intentionale* (*auch wohl mentale*) *Inexistenz* であり、またこれは必ずしも表現の曖昧さを全面的に免れてはいないが、われわれのいう、内容への関与、対象(これを実在と解してはならない)へのさしむけ、もしくは内在的对象性にほかならない。どのような心理現象も、必ずしも同じ仕方ではないにせよ、自己のうちになにかを対象として含んでいる。表象ではなにかが表象され、判断ではなにかが肯定もしくは否定され、愛ではなにかが愛され、憎しみではなにかが憎まれ、欲求では、なにかが欲せられる、などというふうに。

対象のこうした指向的内存在はもっぱら心理現象だけの特徴をなすものである。どのような物理現象もこれに類した性状を呈さない。そこでわれわれはこう言って心理現象を定義することができる、すなわち心理現象とは、対象を自己のうちに指向的に含む現象である、と¹⁾。

この主張のポイントはしばしば見誤れてきた。ブレンターノが判断や愛などを例として言いたいのは、こうした心理現象の特異さが、物理現象にはない、その内容なり対象なりへのさしむけにある、ということではない。それだけのことであれば、心理現象の特徴を言いあてたことにならないのは明らかである。というのも、意味上で心理にかかわりないさまざまな他動詞、たとえば「衝突する」、「つぶす」、「ずらす」などもまた対象へのさしむけを含みとするからである²⁾。

ブレンターノが言いたいのは、心理現象においては、それがかわる対象が実在しなくともよい、という点がこの現象の特異さであるということだ。だれかがボールを蹴るというのであれば、そのボールが実在するのでなければならぬ。ところが、昼日中カンテラをともし、狂おしげに市場を走り、こう叫んだ人間がいた。「私は神を捜している！」(ニーチェ、『悦ばしき知識』3章 125)しかし神はすでに殺害されて不在なのだ。それでも神を捜すことはできる。万一ということがあるかも知れない。このように、心理現象において対象は独特な様相を呈している。ブレンターノはそれを<内在的对象>der immanente Gegenstand と称し、その存在の様相を<内存在>Inexistenz とよんだ。In- は、もちろん、心の裏に in の連想を許すものである。——しかし、実在とはあくまでも別で、とはいえ無いわけでもない、このような内在的对象とは、一体どのようなものなのか。ここには存在論的な数かずの辛苦が、確実に、待ちうけている。

内存在の存在論への深入りを避け、ひとまずここで踏みとどまろう。私たちの企図には、ただ、引用した主張——それを<ブレンターノ・テーゼ>とよぼう——を要約することで足りるのである。

ブレンターノ・テーゼ：

- (i) すべての心理現象が、
- (ii) そして心理現象だけが、指向性をもつ。

言語の指向性テーゼ

言語分析の流れに棹さすと同時に、哲学史に明るく、また現象学にも同情をよせるチザムは、ブレンターノ・テーゼの裏づけに新たな工夫の数かずをこらしている。その考究の内容は大きく分けて二つの部面に、すなわち言語的部面と形而上学的部面とにわたっている。

言語活動を観察すると気付かされる点であるが、われわれが心理の状態や出来事について語るときには、どうやら、言語を特異な仕方で使用しているらしい。それは、非心理的な状態なり出来事なりについて語るときには、それに就かなくともすむような言語使用なのであ

る。言いかえれば、心理現象を記述するのに使用される言語表現は、非心理現象の記述のさいにはみとめられないさまざまな論理的特性——これを一口に、〈言語の指向性〉とよぼう³⁾——をもつように思われる。そこでチザムは、ブレンターノ・テーゼのいわば言語版とでもいうべきテーゼを唱えるのである。私たちはこれを〈言語の指向性テーゼ〉もしくは〈チザム・テーゼ〉と称することにする。すなわち、

……(1)非心理的ないし「物理的」現象を記述するのに指向的言語 intentional language を使用する必要はない。そうした現象にかんしてわれわれが知り、信ずるあらゆることは、指向的ではない言語で表現しうるのである。さらに……(2)ある心理現象を記述しようと望むならば、——とくに、思考、信念、知覚、視覚、知識、欲望、希望などを記述しようと望むならば、(a)指向的である言語を使用しなくてはならないか、あるいは(b)非心理的もしくは「物理的」現象を記述するときには使用する必要のない語彙を使用しなくてはならないか、このいずれかである⁴⁾。

このテーゼはそれだけで考えれば、なにか特定の形而上学（たとえば物心二元論）に結びつくものではありえないし、またチザムも断っているように⁵⁾、指向性の存在論的探究（それはたとえば内在的対象の身分についてあれこれ考察するだろう）とも別箇である。テーゼは、もっぱら言語使用一般のなかで一つの目ざましい区別が設定できることを説いている。

しかし、チザムの考察にはもう一つの部面が残されている。言語の指向性テーゼが言語外の領域にかんして直接なにかを明言するわけではないとしても、チザムの企図はあくまでも、ブレンターノ・テーゼに含意された、心理的なものの還元不可能性を確認することにある。言語の指向性は、本来の、意識の指向性を前提する、といった予想がここには働いている。さらに、言語の指向性テーゼが主として意味論と関連するのにたいして、これとは別に、指向性の語用論的探究というものが考えられる。言いかえれば、言語の指向的使用の实在を裏づける仕事とは別に、こうした使用の制約を言語使用の主体との関連で探す仕事が残っているのだ。はじめにわれわれは〈意味〉に導かれている。しかしやがてわれわれは〈意味の主体〉に直面することになる。こうした第二の部面については後に詳しくみることになるが、ここでごく簡略にその問題の所在にだけはふれておこう⁶⁾。

心理現象を記述する言語の特性、すなわち指向性が確かに認められるとしよう。こうした特性をもつ言語には、それなりに、人間活動の一定のシステムが対応するだろう。ウィトゲンシュタイン流にこれを〈生活形式〉とよぶと、指向的言語をたずさえた生活形式は、非指向的な、物理言語しかもたない生活形式とはおのずと異っているだろう。以上は観察の範囲にはいることがらである。さらにここを越えて、一つの理論的見通しを得ることができる。

それはおのおの言語の特異さは、それぞれに対応する生活形式の特異さから十分に説明されるはずだ、という見通しにほかならない。しかしここでただちに問題が生じるだろう。指向的言語を特徴づけるのに、ある種の生活形式をもちだすだけですむのか、この生活形式を特定化するためには、さらに、非言語的な指向性へ訴えねばならないのではないか。もしもそのとおりであるなら、指向的言語の制約はある種の生活形式ではなく、意識なり心なりといったある意味での実体に、もとめられるべきではないか。

チザムはこの設問にはっきりと、然り、と応じているが、私たちは順序として、先ず第一の部面から検討することしよう。

指向性の基準 その1

言語の指向性テーゼを実地に裏づけるには、言語使用一般のなかで指向的／非指向的の区別をその都度のケースにおいて判別する基準が呈示されねばならない。チザムの指向性にかんする考究の大半は、こうした基準案出のための工夫についてやされている。実際に提案された基準は、数えようによれば、かなりの数にのぼるけれど、以下では、研究者による言及の多いもの、それをめぐりチザムとその批判者とのあいだで討議がおこなわれたもの、そして確実に問題性を包含するとみなしうるもの、などにしぼって、そのうちの三種を取上げることとする。

はじめに検分しようとする基準は、比較的早くから、すなわち1952年発表の論文 '*Intentionality and the Theory of Signes*', *Philosophical Studies*, 3 で一部分呈示され、のちに完備した四つ組の形で、註(4)に示した論文や著書 *Perceiving: A Philosophical Study*, 1957 で述べられたものである。ところで、この基準にたいしささまざまな批判が加えられた結果、チザム自身これを指向性の「不十分な基準」⁷⁾と認めざるをえなくなった。それにもかかわらず、この基準の検討によって私たちは、指向性なるものの論理的素性について、少からぬ示唆を手にいれうるだろう。

さて、問題の基準は四項目がセットになっていて、それぞれが指向性の十分条件を与えるというものである⁸⁾。

T1. 単文の平叙文が指向的なのは以下の場合である。すなわち、この文が実名詞的表現（名もしくは記述）を使用しているにもかかわらず、この文およびこれと矛盾対当にある文のいずれもが、実名詞的表現が外延をもつとも、反対に、もたないとも、そのような外延にかんする含意を有さない場合である。

T2. 複文の平叙文が指向的であるのは、この文もこの文と矛盾対当にある文も、従属節の真理値についてなにごととも含意していない場合である。

T3. 平叙文が指向的であるのは以下の場合である。すなわち、この文に実名詞的表現が含まれており、もしもこの表現をそれと同じ外延をもつ実名詞的表現に代置すれば、得られた文の真理値が元の文の真理値と変わる場合である。

以上に加えて最後に次の定義を与えることによって、基準は一応の完備をみる。

T4. 重文が指向的であるのは、この文を構成する少くとも一つの文が指向的である場合であり、かつその場合にかぎられる。

それでは早速基準を実地に使ってみよう。次の単文は T1 によれば指向的である。

母親は娘にふさわしい夫を捜している。(She is looking for a suitable husband for her daughter.)⁹⁾

というのも、この文も、この文と矛盾対当にある文「母親は娘にふさわしい夫を捜していない」も、「娘にふさわしい夫」の外延にかんしてはなにごととも含意していないからである。娘は一生孤閨をかこたねばならないかもしれないし、目出たく好ましい伴侶を得るかもしれない。いずれにせよ、そうしたことがらは例文（またはその否定形）にはあずかり知らぬところなのだ。

次に複文を調べてみよう。

母親は娘にふさわしい夫がいることを信じている。(She believes that there is a suitable husband for her daughter.)

この文（またはその否定形）は「娘にふさわしい夫がいる」の真か偽かについて、なにごととも含意してはいない。真を信じないこともできるし、偽を信じることもできる。真偽と信・不信が独立であるのは、たんに経験にかかわる領域が話題の場合だけではない。非経験的な、恒真文 tautology もしくは分析的に真なる文に「…を信じない」を付すこともできるし、逆に、恒偽文 contradiction もしくは分析的に偽なる文に「…を信じる」をかぶせてえられる文にも必ず妥当な解釈がありうるのだ。たとえば、

かれは $5 + 7 = 13$ だと信じている。

かれは雨の日は天気が悪いとは信じない。

最後に T3 がうまく働く例を示そう。次の文が真であるとせよ。

かれは八岐の大蛇が想像の産物であることを知っている。

かれはまたこの怪物が素戔鳴尊に斃された故事に通じている。しかしかれは、八岐の大蛇が尾に草薙の剣を隠しもっていたことまでは知らない、と仮定しよう。「草薙の剣」が固有名詞であることに注意を促しておきたい。したがって、次の同一性命題は真である。

八岐の大蛇＝尾に草薙の剣を隠しもった大蛇

ところが、はじめの文の「八岐の大蛇」にこの命題の右項を代置してえられる文、

かれは尾に草薙の剣を隠しもった大蛇が想像の産物であることを知っている。

は、仮定により、偽にはかならない。

指向性と内包性¹⁰⁾

チザムのこのような基準の構想には、論理学の基礎にふれる論点が含まれている。かれが基準の定式に工夫をこらしているとき、哲学的論理学 philosophical logic の具体的な問題が念頭にあったことは疑うことができない。ここは論理学の歴史について述べる場所ではないが、ごく簡単に言うと、前世紀末から今世紀初頭にかけて果された論理学の革新から、今日「古典的」とか「標準的」とか通称される論理学が一応完成されたのだった。この論理学はいくつかの原理をふまえているが、ここに問題とされたのがいわゆる〈外延性の原理〉¹¹⁾にほかならない。それは以下のような主張である。

E1. ある言語におけるどのような文であれ、もしもこの文に含まれる、文以外の表現をこれと外延をひとしくする他の表現に代置したとしても、この文の真理値は不変である。

しかも、

E2. この言語におけるどのような文（分子文）の真理値も、この文を構成する文（原子文）を、他の、これと同じ真理値をもつ文と代えても、不変である。

E3. 前項の条件をみたしていないような言語はない。

E1 と E2 の連言はある文が外延的であることの必要十分な条件である。さて、E3 を含めて以上の原理は、きわめて重大な含みをもつ。ここからただちに、かつてウィーン学団によってかけられた〈統一科学〉 unified science の理念がひきだされてくるのだ。さまざまな物理科学はもとより、心理学、生物学さらには歴史学なども、外延性を体現した一つの言語で表現されるはずである。この原理が妥当ならば、明らかに、言語的二元性を言うかの指向性のテーゼは斥けられねばならない。

指向性の基準と外延性の条件とをつきあわせてみよう。実は前者は後者の消極的な裏がえしなのである。E1 は外延性の必要条件であるから、これに適合しない文は内包性をもつ。ところで、E1 の否定の述べているところは T3 と同じである。したがって、T3 は内包性の十分条件にほかならない。E2 についても同様のことが成立つ。E2 に適合しない文は内包的な文である。ところで T2 は E2 の否定とある意味で同じことを述べている（ただし、重文についてこの限りではない¹²⁾）。したがって、T2 は内包性の十分条件である（重文にかんしてはこの限りではない）。

残る問題は T1 についてであるが、これは外延性の条件と直接の関係はない。問題はむしろ次のことにある。標準的な述語論理学では、〈存在汎化〉という規則が設けられている。すなわち、

$$Fa \vdash (\exists x)Fx$$

は演繹に用いられていい。なぜこのような規則が体系に導入されているかといえば、標準的な論理学には、存在にかかわるいくつかの前提——(i)すべての個別名辞は指示している。(ii)話の世界が空であることはない——がひそむからである¹³⁾。記述が介入するさいにも似たような事態が生じる。たとえばよく引かれる例で、

The King of France is bald.

は次のように分析される。

$$\begin{aligned} & (\exists x) . (((x \text{ is the king of France}) \ \& \ (y) (y \text{ is the king of France}) \\ & \quad \equiv (x=y)) \ \& \ (x \text{ is bald})) \end{aligned}$$

ここからは $(\exists x) (x \text{ is the king of France})$ が帰結としてみちびかれるのだ。
ところが既出の文、

She is looking for a suitable husband for her daughter.

は、記述を含んでいると思われるのに、決して上のような推論を許さない¹⁴⁾。

以上のように、チザムの基準がすべて消極的様相をおびているのは、それらが外延性原理に拠る論理学のあとにやってきて、自己の固有な領分を確保しようとしたからである。

それでは T1 によって指向性を検出される文は、T2, T3 にかんしても、同時に内包的であろうか。ここでも指向性は内包性の十分条件だろうか。この問にはコーンマンが反例を示している。次の文は T1 により指向的である。

John is thinking of Alaska.

というのも、この文（またはその否定形）が Alaska の外延についてなにも含意していないから。ところがこの文には E1 が合致するのである。試みに、次の等値を利用して文をあらためてみよう。

Alaska = the largest state of the United States

すなわち、

John is thinking of the largest state of the United States.

がえられる。この代置による書きかえは元の真理値をそこなわない。というのも、元の文で Alaska が使われているのは、ジョンがある特定の場所を考えていると言わんためであって、そのためには、問題の場所に事実上適合するどのような名でも記述でも使用してかまわないからである¹⁵⁾。

まだ重文にかんする観察がされていなかった。ところで、重文にかんし、内包性が指向性の十分条件でないことは同様にコーンマンによって示されている¹⁶⁾。ここではかれと同じ反例を利用して、しかし、かれとはちがう仕方でもって事情を明らかにしておこう。次の反事実的条件文、

もしもソクラテスが有罪を認めていたのなら、かれは毒人参をのまずにすんだらうに。

(If Socrates had pleaded guilty, he would not have had to drink hemlock.)

は外延性の条件 E2 に合致しないから内包的である。この文が要素文の真理関数ではないことは、この文の対偶が成り立たないことで確かめられよう。ところでこの文は T3 には合致しない。「ソクラテス」を「プラトンの師」に替え、「毒人参」を「英語で hemlock とよばれる植物」にしても文の真理値が変わらないからである。さらにこの条件文が T1 に合致しないことは次のようにして示される。反事実的条件文が仮定法で表現されている事実は、実は条件文の論理性にとって本質的ではない。例文は直説法で表わされた次の文を含意するように思われる。この文は元の文を換質换位して、さらに接続詞を取りかえて得られたものである¹⁷⁾。

なるほどソクラテスは毒人参を飲まねばならなかったが、しかしかれは有罪を認めはしなかった。

(Though Socrates had to drink hemlock, he did not plead guilty.)

重文を構成する二つの文のうちで最初の文をみよう。この文は行為動詞の目的語「毒人参」が外延をもつことを含意する。したがってこの重文は、そしてさかのぼって、この重文を含意する元の条件文は、T1 に合致せず、指向性を含んではないのである。

ここまでの吟味の結果をとりまとめると、(i) T2, T3 が指向性の基準というより内包性の基準であろう、という疑い、(ii) T1こそ指向性の基準にふさわしいのではないか、という見込みが立つ。ただしこの見込みは、know などを述語とする文が非指向的となるという隘路に通じている。事柄をはっきりさせるべく今度は基準を逐一点検してみよう（ただし T4 ははぶく）。

基準の点検

T1 からはじめよう。すでに確認したことであって例は略すが、これによっては直接目的

語をとるある種の心理的動詞が作る文が非指向的であることになってしまう¹⁸⁾。問題の動詞とは, know, perceive, see, remember などの, いわゆる認識動詞 cognitive verbs にはかならない。どのような方策をとるべきか。ここには二つの可能性がある。一つは, このような動詞の作るチザムのいわゆる認識文 cognitive or epistemic sentence は明らかに指向的でないから, T1 は指向性の必要条件ではない, と断定すること。それでは, 認識文をどのようにして救ったらよいか——これが残された問題であろう¹⁹⁾。別の可能性とは, 直接目的語を含む認識文のみならず, 従属節をしたがえた認識文さえも, 指向的でないことを決然認めること。それでは, 認識文に仮託された「指向性」をどのように説明したらよいか——これが残された問題であろう²⁰⁾。

T1 が指向性の十分条件でないことを, チザムその人が「例外」を各種あげて示している。類似を語る文はこの例外の一つである。

蜥蜴のなかには^{ドラゴン}怪竜に似たものがある。

この文（もしくはその否定形）から怪竜の外延にかんしてはなにもひきだせない。ここには T1 が適合する。しかし類似は, 明らかに, 心理現象とはいえないだろう²¹⁾。問題はこうした例外がこのほかにも各種あるのではないか, という疑いを打消せないことである。T1 を維持するにはその都度 (ad hoc) 例外を排除する付則を設けねばならない。これは不都合である。

T2 についてみると, T1 で問題をかもした認識文がやはりここでも基準の障害となっていることがわかる。記憶について述べる文,

私はそのひとに一度会ったことを憶えている。

(I remember that I met her once.)

からは,

私はそのひとに一度あった。

がみちびかれる。したがって T2 は指向性の必要条件ではない²²⁾。ただし, このような文を心理現象の表現としては否認するのならまた話は別である²³⁾。

さらに, T2 は指向性の十分条件でもない。

許可なく銃砲を所持するのは不法である。

この文は英語では *It is illegal that p.* の形をとるだろう。この文(その否定形)は *p* が真であるとも偽であるとも述べてはいない。したがって T2 はこの文を指向的だとするだろう。しかし、明白に、この文はなんら心理現象を言うものではない²⁴⁾。他に二例をひいておく²⁵⁾。

指向性にかんするこの論文の11ページに *p* と言われている。

誰も *p* と言って笑わずにはおられなかった。

最後に T3 について。まずこれが指向性の十分条件でないことはたやすく知られる。というのも、心理にかかわるとは思われないさまざまな様相文 *modal sentences* が、T3 に適合するのは、つとに明らかだからである。一例だけをあげる。以下の文で、一番目が問題の様相文、二つ目が同一性をあらわす文、最後が二つ目の文を利用して書きあらためた元の様相文にほかならない。

12 > 9 は必然的に真である。

12 はキリストの使徒の数である。

キリストの使徒の数 > 9 は必然的に真である。

ところが最後の文は明らかに偽となる。というのも、キリストの使徒が場合によってはヨハネ一人きりであったかも知れない、という想像が可能だからである。

私たちはすでに T1 によれば指向性をもつと判定しうるが、同時に E1 をも充足する文、したがって T3 を必要としない単文の例を見出した。T3 は指向性の必要条件ですらないのだ²⁶⁾。

基準と文の含意

T1 は認識文を救えない一方で、多くの心理的な文の指向性を検知する。逆に、T3 は認識文の指向性を明らかにするが、しかし T1 によって折紙をつけられた指向的な文をとりがしてしまう。しばらく T1 および T3 が指向性の十分条件たりえないことには頓着しないことにしよう。私たちはこの事態に、また別の問題を認めるのである。それは、多くの同じ心理的な動詞が直接目的語をとる構文と従属節を従える構文の両方に登場しうる、という観

察の事実にかんしてである。ケニーの次の例²⁷⁾を調べよう。例示者はこれを妥当な推論だと言いが、それに疑義はないだろうか。

- (E) Dr. Jekyll = Mr. Hyde
 (1) James knows Dr. Jekyll.

 (2) James knows Mr. Hyde.

もちろん(E)と(1)とから、James knows Dr. Jekyll=Mr. Hyde. は導かれない。しかし少くとも(2)を妥当な帰結とするのは許されるだろう。これは、T3に(1)のタイプの文が合致しないことの証拠である²⁸⁾。

しかしここで(1)が曖昧であることを見逃すべきではない。(1)の一つの意味において、ケニー一流の推論は行われている。すなわち(1)は、ある人物が他の一人物、ジキル博士がそれであるところの人物と＜知る＞という関係に立つこと、前者が後者と近づきになっている make acquaintance with ことを意味するのだ。この場合、(1)は個別名辞の指示にかんして透明な referentially transparent 文脈を形づくっている。これにたいしてマラスは(1)に別の意味がある、とした。直接目的語をとる構文は、時として、複文を含意する、と見做されねばならない。そこで今、(1)は(3)を伴意すると考えよう²⁹⁾。

- (3) James knows of someone that he is Dr. Jekyll.

このように見れば、(1)の意味とは、ある人物が他の人物にかかわる観念を抱くことと解釈されよう³⁰⁾。この場合、(3)は指示にかんして不透明な referentially opaque 文脈を形づくる。(2)に伴意された文も同様にとりだしてこれを(4)とすると、文(E)が真である条件の下で、次表の付値が定まるだろう。

(1)	(3)	(2)	(4)	T3
T	→ T	F	← F	成立
F	← F	T	→ T	成立

右端に記したように、二つのケースでいずれも T3 が成立している。このように、(1)のタイプの文も、含意関係次第でその指向性を明示しうるのだ³¹⁾。

あるところでチザムは、指向性をおびた動詞が両義的である、という見解にコメントを加えている³²⁾。そこで引かれた例こそ私たちのと異なるが、それが言わんとする実質は次のと

おりである。両義性という見地には、ある心理現象において、一人物が二つのまったく異なる対象——一つは自己と同じ資格を備えたもの、二つはいわゆる「命題」——に関係づけられる、との暗示が横たわっている。これはミスリーディングである。元の文は両義的というより、むしろ、二つの可能性を特定化しないまま呈示しているという意味で不確定である indeterminate にすぎない。次のショートショートはチザムのこの区別(両義的/不確定)について少しく教示するところがあるだろう。

P町の塵芥捨て場から無惨な他殺死体が発見された。損傷がひどく性別すらわからない。僅かに残された手掛りから糸がたぐられて、ようやく、少くともA子、B子、C男の三人が深くこの件にかかわるらしいと知れた。(a) 辣腕をもって鳴るS刑事は、真犯人を女だと信じた。(b) かれに名馴みのT探偵もまたそうだった。ほどなく刑事がB子を逮捕して、事件もこれで幕かと思われた。ところが探偵は、女が犯人であるはずはない、と主張して、逮捕の無謀を咎めたのだった。

(a)は「…と信じる」の両義性のゆえに両義的であろうか。ここで(b)の「もまたそうだ」に注目しなければならない。この句の用法は、すでにある行為が同一指定されているときに、再びこの行為に言及することにある。したがって、(a)が両義的なら、(b)もそっくりその両義性を遺伝的に受けつがなければならない³³⁾。しかしそうであるなら、この話のように犯人を追う二人の話がくいちがうことはあるまい。Tの非難が刑事には唐突にきこえたとしたら、それは<信念の意味>を特定化せずに使ってきた虚を衝かれたからであって、話自体に矛盾はない。というのも、探偵は「犯人は男だ」と信じたからである。案に相違して真犯人はA子であった。それでも刑事はさすがだった。かれは犯人は女だと目星をつけたまでは正しかったのだ。探偵は二重の過ちを犯している。かれは殺された被害者が犯人その人だと誤信しているからである。実は、哀れをとどめたその被害者こそC男にほかならなかった。このように見れば「…と信じる」が非両義的な、たんに限定を欠く意味をもつにすぎないと言わねばならない。言いかえれば、「…と信じる」がなにかものに関係するのかそれとも命題に関係するのか、この関係の<何にたいして>の点で漠然とした意味をもつような文脈が確かに存在するのである。

マラスは文の含意関係に基いて指向性の基準を点検していた。これは、両義性という概念がこの場にふさわしくないことを示す事実だろう。たとえば、「人間」はある意味で「男」、他の意味で「女」であるが、この二つの意味をもつとはいえない。そもそも性にかんして「人間」は無関心なのだ。「太郎は人間であり、花子もまたそうである」と言うとき、「もまた」が使われているからといって、花子が無情ヒゲを生やした六尺豊かな大男であるとい

うのではない。「人間」は同時に「男」でも「女」でもありうるものである。「人間は死すべきである」は「男は死すべきである」を伴意する。前の文が真なら、後の文も必然的に真。後の文が偽なら前の文も必らず偽。最後に、前の文が偽であるとき、後の文の真偽は不定である。というのも、「女は不死である」が真であるとき、前の文は偽となるが、だからといって男についてその可死・不死を断言できないからである。

基準の点検を実施するにあたって、文の含意関係がいかに重要かは以上から明らかだろう。問題は、個別の例文を観察してそこからある含意をとりだすとき、いったいなにによってこの分析が保証されるかにある。一つの含意を斥け他の含意を選ばせる、暗黙裡の原理がここには働いているだろう。また他方、私たちの観察が十分行きとどかないまま、性急に、含意の一定の形がきめられることもあるかも知れない。したがって、気付かずにいる原理を明示し、また経験を深めることが、他の科学におけると同様、ここでも要請されているのである。しかし、心理現象およびその類縁にかかわる言語表現については、その含意関係の整備したカタログを製作するには不十分な原理しか、それに貧弱な観察しか、いまだ私たちの所有に帰していないように思われる。

基準への反例

指向的文の含意をめぐる観察は、指向性の基準の適用にかんし、ひいては基準の設定の構想にかんしても重要な教訓をさずけてくれる。ある基準を一つの指向的文へ適用しようとするとき、適用の可否は、明らかに、指向的文の論理形式次第である。ということは、基準を実地に使うためには、あらかじめ文の形式が一義的に与えられていることを必要とする、ということにはかならない。満足のゆく基準を作るまえに、個々の指向文の分析をやり終えていなければならないのではなからうか。ところでチザムが考察の目をむけているのは、明確な輪郭をあたえられた人工の言語などというものではなく、生の、錯雑きわまりない自然言語である。そこでは一つひとつの事例へ個別に分析のメスを揮う以外に、事例の性状を明らかにするすべはない。ある表現がどのような含蓄をはらむかは、周到な経験科学的研究、すなわち言語学的研究によって明らかにされるべきだろう。残念ながら、指向的文の性状について系統立てた言語学的研究はまだ不十分にしかおこなわれていないようである。それならば、そのような研究が達成される日まで、指向性の基準の案出を棚上げするほかはないのだろうか。しかし、研究が具体的にどういう段階にさしかかれば、さしひかえられていた懸案に着手できるのか、研究の〈達成〉のみたすべき要件はなんなのか、このところがはっきりしなければ、上のような言い方は、たんなる逃げ口上とも受けとれるだろう。一方で、経験的研究は必要である。しかし他方で、言語の指向性が直観にあたえられた事実であるかぎ

りは、この指向性をひとまず模型として製作する作業も欠かせないだろう。

問題は、もともと、論理学と自然言語との関係がいくぶんぼんやりしている、という事態から由来する。かの外延性原理もこの漠たるあわいに据えられたものだ。大雑把に言うとチザムの指向性の基準は、すでに見たように、この原理の裏がえしの表明である³⁴⁾。そのかぎりにおいて、基準の適用そのものに問題が——言い換えれば、基準をどう使ったらよいかわからないという不確定性が、チザムの考究にはつきまとうのも無理はない。

認識文はその一つの含みにおいては指向的であるとされ、他の含みでは非向的になる例だった。これとはちがって、どの基準によっても指向性を検出できないが、それにもかかわらず、たんに非心理的な表現としてそれを捨てるのには疑義が残る文がある。これにはどう対処したらよいだろうか。たとえば、

かれは痛がっている。(He is in pain.)³⁵⁾

この文はそもそも単文だから T2 は問題外で、残る T1 もしくは T3 が問題になるが、しかしこの文には実名詞的表現が使われていないので、どちらもここに適用不可能である。要するにこの文は非指向的である。しかし「痛がる」は心理現象ではないだろうか。もしそうだとすれば、この文は指向性テーゼへの反例という資格をもつ。というのも、テーゼによれば、およそ心理現象を記述するためには、指向的言語を使わねばならないからである。これを反例と認定することは、心理現象の表現にとって指向性がたんなる十分条件にすぎないことの甘受にはかならない。この窮地から逃れるすべがあるのだろうか。実はまだ途が残されているのだ。元の文を言い換えて得られた文が、基準に合致することを示せばよい。言い換えの一例はこうなるだろう。

かれは痛いのを感じている。(He is aware that he is in pain.)

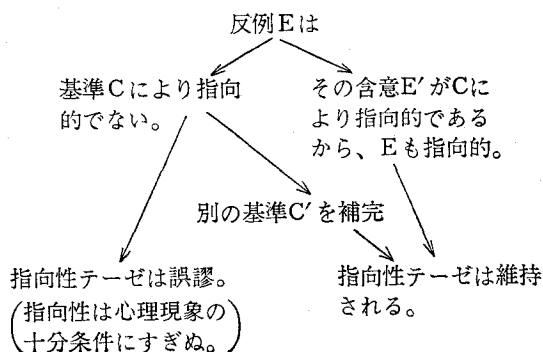
この文は手許の基準 T2 によって指向的なのである。かれは暗示によって偽の痛みを感じているだけかも知れない³⁶⁾。

この場合の処置が適切であるかどうかはしばらく問わない。もしも適切であるとしても、今後、言語の観察はどのような反例を明るみにひきだすかも知れないのだ。将来もちあがるかも知れぬ個別の問題がそのつど解決され、チザム・テーゼが維持されるだろう、という見込みは、もちろんア・プリオリには与えられていない。このテーゼは、基準に実質化されつつ、あくまでも有益な作業仮設にとどまるのである。

場合によっては、今しがた見たようなやりくりでは難局をきりぬけられないが、かといっ

て、そのことが指向性テーゼの反例を構成しはしない、という判定が下されることもあるかも知れない。すなわち、この時には、問題の文が端的に心理的な文ではない、と言え十分である。

以上のように「反例」の扱いにはいくつかの可能性があるが、それを一覧表にまとめてみよう。



このように事態をこみいらせているのは、提出された〈基準〉がたんに〈指向性の標識〉 a mark of intentionality,³⁷⁾ 言いかえれば、文が指向的であるための十分条件であって、決して定義ではない、という事実が控えているからである。手持ちの基準が役だたずで、それによっては求める指向性の徴候を見いだせないのならば、別に基準を新造することができるし、またそうしなければならない。事実チザムはいわば手をかえ品をかえ各種の基準を考察している。四つ組の基準を呈示したとき、チザムははじめからこのことを見越していたようである。というのも、それらの基準が、英語におけるあらゆる指向的表現を選別するに足るものであるという明言はなく、むしろ、ある範囲の心理現象にまつわる表現だけが基準に合致することがそれとなく言われているからである³⁸⁾。

擬似心理的なもの

三つの基準 T1, T2, T3 が、それぞれ、心理にかかわる表現の特性を明らかにするのに過不足があるということは、これらの基準が本来の意図に副い難い事実を示している。しかしこの不如意は、ある意味で、試みが無駄ではなかったことを語るものだ。というのも、基準がある点では十分であり他の点では必要でもあるが、また別の点では十分でも必要でもない、という全体の配置の中に、私たちが〈心理的なもの〉と理解するものの形姿があらわれているはずだからである。文が基準に合致しているかどうかは、文の論理形式が判明していれば決められるだろう。しかし基準に合致する文、したがって指向的な文が〈心理的〉で

るかどうかは、文の論理形式と基準によっては裁決しえないのだ。心理的な表現を判別するために基準をしつらえよ——この要請にこたえることのできる者は、すでに心理的な文をそれと認知しうる者であろう。明らかに心理現象にかわると思われた認識文が T1, T2 によっては指向性を検出できず T3 によってようやくそうできること、しかし「信じる」はどの基準によっても指向性を認めうること、ところが、T3 には、明らかに非心理的な種々の様相文が合致すること——こうした結果は、私たちの心についての理解をいわば整わぬ破線によって描写してくれているのだ。

チザムは基準を点検するのに、心理的であることが直観に知られやすい文例に先ずあたっている。私たちは反対に、直観が曇らされがちな例、そして心理的とは一見思われない例を基準によって調べてみよう。

はじめは、タイヒマンの挙げた〈捜し求める〉search という動詞である³⁹⁾。次の文、

私はきれいなシャツを捜す。

は(そしてこの文の否定形も)、必ずしも目当てのシャツが抽きだしに確かに収まっているとも、いないとも、述べてはいない。T1 に文は合致する。POD には search をこう釈いてある。look or feel or go over (person or his face or pockets, receptable, place, book) for what may be found or to find something whose presence is suspected。これだけからは search が純然たる「心理的な」行為であると決めるわけにはゆかない。むしろこの説明には、search の意味に少からず物理的成分が混入していることがあらわれている。たとえば、百円玉の一つもあったかと、ポケットへ手を入れ、つまみだして裏返し、穴に指を突きいれなどと索るのである。searching a person 身体を検査する、searching a book (引用句などを求めて) 本を繰る、など主だった例は、みなそうした物理的要素を欠けば、その本来の意味がたなしになるものばかりである。ひいては、「探照灯」searchlight とか、月面機械が月表面を「探索する」などという擬人化も不可解ではないのである。しかし、これらはたんなる擬人化にすぎない、と言うべきだろうか。あるいは逆に、searching one's memory 記憶をさぐる、などという、物理的成分の感知されない例の方が一種の比喻だとすべきだろうか。

直観が曇らされがちな例のあとに、明らかに心理的ではないが、立派に指向性を有する事例をあげよう。「…は毒である」はこの空所を「砒素」、「ストリキニーネ」などによって満たせば真なる文がえられる。しかし「…は酸性である」と比較すると、前者のいちぢるしい特色が浮彫りになるだろう。毒とはなにかにとって毒なのである。トリカブトの根に含有の成分は、野獣にとって毒であるが、トリカブトにとって毒でないのは自明である。酸性に

は、このような、〈対象へのさしむけ〉の痕跡はない。対象へのさしむけの構造をさらに仔細にみる必要があるだろう。毒はあるものに対して適切な仕方と与えられると、このものに効果を生む。毒は全身にまわる、毒は効く——このような言い方に知られるのは、毒が〈作用〉を発顕するものであるという事実にほかならない。この作用が評価の装置に結合されて、これは毒だ、といわれ、同じものが、実に〈薬〉にもなる。毒にも薬にもならぬものとは〈無作用〉のもののことだ⁴⁰⁾。こうした毒をふつつ私たちは心理現象には数えない。ところがこれには T1 のみならず T2 までが適用されるのである。次の文、

吡素は人間にとって毒である。

は、場合によって、人間の存在を前提している、と言いうるかも知れないが、決してそれを含意してはいない。例文が真偽いずれの場合でも、それは人間の存在を話の前提とする。またもしも人間が今瞬時にして絶滅したとすれば、例文の真偽は不定であろう⁴¹⁾。したがって例文は T1 に合致する。また「…は毒である」は空所を文によっても満しうる。たとえば医者是这样忠告するだろう。

あなたのような人が毎日三十本も喫煙するのは体に毒ですよ。

しかしこの文は、「あなたのような人が毎日三十本も喫煙する」の真偽についてなににも含意していない。医者は医学常識を述べたのであって、ここには、「たとえばあなたが…するとして」といった類いの仮定すら含まれてはいない。そして、この常識が真かどうかは医学という経験科学の体系のなかで決められるべきことがらである。例文は T2 に合致する。最後に T3 についてはどうか。

(1) $C_{29}H_4N_2O_4$ は毒である。

(E) $C_{29}H_4N_2O_4$ = アメーバ赤痢の特効薬

二つの文から次を得る、

(2) アメーバ赤痢の特効薬は毒である。

この例は一見 T3 に合致しているように見える。(1)と(E)が真であるのに、(2)は真ではないように思われるからである。いわゆる矛盾律によれば、薬が同時に、そしてまた同じ事情の

もとで、薬でありかつ毒であることは不可能である⁴²⁾。しかし、(1)を真にするさまざまな条件の集合 C_1 (服用の量、頻度、他の薬物との併用の有無など) と (E) を真にする条件の集合 C_2 とは一般にひとしくないだろう。文(2)にはこの条件が特定されていないが、もしもこれを補えばその外観上の矛盾を除去しうられると思われる。しかしつねに $C_1 = C_2$ であるようなケースを考えることが可能なら、この例は T3 をも充足するのである。

このような例は、心理的なものが、一見心理的ではないものと、部分的にせよ、類似の構成を具える事実を暗示しているのではないか⁴³⁾。この類似が精確にはどのような構造のものか、心理的なものがある範囲の類縁を保ちつつ、しかも他にはない独自の要素を含むとすればそれはなにか——これは探究すべき課題である。しかし私たちは、心理現象に唯一独自なものを求めるあまり、捨てられ、顧みられなかったきれぎれの事実のなかに、心理的なものの〈意味〉の反照を見透す努力を怠るべきではない、とだけは言っておきたい。

指向性の基準 その2

その後チザムは指向性の基準の別形を呈示した。それははじめ、精神哲学をテーマとするシンポジウムの席で公にされ、後にこの内容は (i) 論文 '*On Some Psychological Concepts and 'Logic' of Intentionality*' として H.-N. Castanēda (ed.), *Intentionality, Mind, and Perception*, 1967 に収められた⁴⁴⁾。さらにこの折の見解はスレイの懇切な批判をチザムがうけいた結果、改訂をほどこされ (ii) 論文 '*Notes on the Logic of Believing*' (*Philosophy and Phenomenological Research*, 24 (1963/64) 所収⁴⁵⁾) として、やや違った形で示されるに至った。すでに見たように、はじめの四つ組の基準は各種の欠陥をもっていたが、とくに T3 は指向性と論理的様相 *logical modality* とを区別しえない点が痛かった。そこで、チザムはこの区別をどのような仕方で行ったかについてもっぱら力をかたむけることになる。この課題をはたすために、かれは〈様相接頭辞〉 *modal prefix* (もしくは〈文接頭辞〉 *sentence prefix* ともいう) を用いて作られ、しかも量化された文の含意関係に着目する。かれの観察によれば、文接頭辞が指向性をおびた場合は、他のものとはちがう含意関係のパターンが示される、というのである。ここでは、(i) の論文とその批判の内容とを考慮しつつ、主に (ii) に示された指向性の基準を取りあげることしよう。

文接頭辞 M とは、それ自身は文ではないが、他の文 p の頭に置かれるとき別の文 Mp を生むような句のことである。たとえば、*It is possible that, John believes that* などがこれにあたる。いま、 M によりえられた文に次の四つを区別することができる。

UC : $M(x)(\Phi x)$

UD : $(x)M(\Phi x)$

EC : $M(\exists x)(\Phi x)$

ED : $(\exists x)M(\Phi x)$

UとEとはそれぞれ普遍量化, 存在量化の, CとDとはそれぞれ〈ひっくりめた意味で〉in sensu composito, 〈分けた意味で〉in sensu diviso の略にほかならない。チザムの例をここでも引いておこう。

UC : It is possible that, for every x , x is material.

(あらゆる x にとって x が物質的である, ということは可能だ。)

UD : For every x , it is possible that x is material.

(x が物質的であることは可能だ, ということがあらゆる x にとって真である。)

EC : It is possible that there exists an x such that it is possible that x is material.

(物質的な x が存在することは可能である。)

ED : There exists x such that it is possible that x is material.

(物質でありうるような x が存在する。)

チザムは検討の結果, 指向的な文接頭辞に特有な表として次をえた。

パターン II

	UC	UD	EC	ED
UC	(+)	—	—	—
UD	—	(+)	—	—
EC	—	+	(+)	+
ED	—	+	—	(+)

この表では, 横列に並べられた文型が縦に記された文型を含意するときに+を (括弧にはいって(+))は含意がとるにたりない旨をあらわす, 含意しないときには—をそれぞれの欄に置いている。そこで, 指向性テーゼは, この表をもとにして, あらたに以下のように述べられることになる。

(a) S believes that をはじめ S knows that, S desires that などの様相接頭辞, つまり明

らかに心理的であると思われる様相接頭辞はすべてパターンⅡに適合する。(b) 明らかに非心理的である接頭辞でこれに適合するものはない。

したがって、このパターンこそ＜指向性の標識＞にはかならないのである⁴⁶⁾。

問題とされた第一の点は、UCがECとEDを合意しない、という観察であった⁴⁷⁾。少しでも理性をもつ人間なら、UCはECを含意するのを認めるのではないか。たとえば $S \text{ believes that } (x) Fx$ が真で、 $S \text{ believes that } (\exists x) Fx$ が偽であるという場合、Sはおよそなにもものが存在するということに無自覚なのであろう。Sが唯物論者だとしよう。かれが、あらゆるものが物質である、と信じているとすれば、当然かれは同時に、物質といいうるなにもものかの存在を信じているのでなければならない⁴⁸⁾。次に、UCはEDをも含意するのではないか。UCが真でEDが偽である場合に、その存在をSが信じるものはないことだろう⁴⁹⁾。かのデカルトは「私は考える、故に私はある」と言った。思考するものはなんであれ、思考するかぎりにおいて存在する、と信じたデカルトの＜我＞さえ存在しない、としなければならない⁵⁰⁾。そこで、はじめチザムは以下を指向性の標識としたのであった。

パターン I

	UC	UD	EC	ED
UC	(+)	—	—	—
UD	—	(+)	—	—
EC	+	+	(+)	+
ED	+	+	+	(+)

この種の含意は、実は、チザムも明言していたように、文の使用にかんする語用論的仮説に基くものである。すなわちチザムは含意関係の判定にさいして、ある種の合理性原理へ訴えている。この原理についてチザムの弁護するところを聞こう。

人は合理的である必要はない——人は矛盾した信念や願望をもつことがある、という事実を訴えれば、指向的様相のごく単純な基準を定式化しうるかも知れない。……しかし、もしも心理的なものと非心理的なものとの区別を確立するために、そして、おそらくは、人間 *person* であるということの本性が「物理主義的」用語では記述も理解もできないことを示すために指向性が使われるべきであるならば、そのような仕方では先に進むのは不都合らしく思われる。というのも、そうであれば実際、われわれは、非合理性の可能性こそ

が心理的なものを物理的なものから切りはなすものである、と言っていることになるだろうから⁵¹⁾。

チザムは、合理主義者らしく、誤謬の可能性を心性の本来の特質とするのに首肯しえなかったのだ。

しかし、ここに困難がひそむことはスレイによってあからさまに示されている。スレイはまずチザムにおいては不分明なままだった〈合理性〉の定義を明示した。(ただしこれはただ信念だけにかんするもので、他のさまざまな心の様態のすべてにかかわる合理性の定義としてみれば部分的な意義しかつくしていない。) すなわち人物Sが自己の信念にかんして合理的である、ということは、次の場合にのみ成立つ。

任意の命題 p と q とにたいし、もしもSが p を信じているのなら、そしてもしも p が q を伴意するなら、Sは q をも信じる。

次にスレイは合理性を要素とする様相接頭辞を作る。すなわち、「Sは自己の信念にかんして合理的であり、かつ……を信じる」S is rational with respect to his beliefs and S believes that であるが、これはチザムの望むとおりパターンIに合致するのである。しかしこれは実に、S beleices that そのものが同じ特性を示さない証左なのだ。もとよりここで、一般に、 M が指向的であるのは、S is rational with respect to his——という図式に合致する事例と連接してえられる文接頭辞がパターンIに適合すれば十分である、という付則を設ければ困難を免れることはできる。しかしこれほど場あたりの ad hoc 仕業はないだろう⁵²⁾。

チザムはこの批判をうけいれ、パターンが信念の主体の本性——本人が非合理であるとかないとか——にかんする偶然的な仮定と無関係に検証されるべきだ、としたのである⁵³⁾。

パターンIIの問題点

チザム、スレイの論争の経過で問題とされる点は他にもある。その点を仮に三つの事項に分けて明らかにしておこう。私たちの見るところでは、はじめの二点はチザムのパターンIIの妥当性を疑わしめるものである。

(i) スレイは、S wonders whether, S fears that, S is thinking about the possibility that などの、明らかに心理にかかわる接頭辞が、チザムのパターンのどれにも合致せず、スレイ自身のいうミニマム・パターンにむしろ適合することを主張した⁵⁴⁾。

ミニマム・パターン

	UC	UD	EC	ED
UC	(+)	-	-	-
UD	-	(+)	-	-
EC	-	-	(+)	-
ED	-	+	-	(+)

これをチザムははっきりと承認している⁵⁵⁾。一例をあげると、ED：ある人物がいるが、私はかれが次期の大統領になるかどうか、いぶかっているは、EC：次期の大統領になるような人物がいるかどうか、私はいぶかしいと思う、を含意しない。ECは人類が絶滅した暁にもやはり真であるが、このときEDは明らかに偽となるだろうから。ところがこの承認の後にも、チザムは**パターンII**を指向性の標識として標榜しているのだ。ここには二つの可能性がある⁵⁶⁾。その一は、**パターンII**が指向性の必要条件ではなく、たんに十分条件にすぎないこと、したがって他の基準をそれへ補わねばならぬこと、この場合は指向性テーゼは維持されている。その二は、問題のパターンが指向性の必要条件でないことを、端的に指向性テーゼの破綻と見ることである。チザムは当然前者の可能性に就く者であるが、しかし、その根拠を一切提示していないのだ⁵⁷⁾。チザム自身、**ミニマム・パターン**が非心理的な様相接頭辞の特性をもあらわすことを指摘しているのであるから⁵⁸⁾、これを**パターンII**の補充として採りあげるわけにはゆかないだろう。

(ii) スレイは S believes that が **ミニマム・パターン**に合致する、と主張した。ちなみにUDがECを含意することと、EDがECを含意することとはある意味で一つのことからである。というのも、もしもこの含意関係が推移的であるならば、UDがEDが含意するから、ここでEDがECを含意すれば、UDがECを含意する——仮言三段論法 hypothetical syllogism——だろうから。またEDがECを含意しなければ、UDもECを含意しない。そこで、EDがECを含意するかどうかだけ検分すれば十分である。ところがスレイによればこの含意は成立しない。次はスレイが呈示した反例である。エドは無神論に凝り固まっている。さて、エドの信じるところでは、アルは信仰に厚く、つねに神ひとりを心に想っている有様である。ここで、エドの信念に反して、神は存在する、と仮定せよ。したがって、

ED：エドの信じるところでは、アルが絶えず想いをよせるにちがいないもの、すなわち神が存在する。

は真である。しかし、

EC: アルが絶えず想いをよせるもの、つまり神が、存在する、とエドは信じている。

は偽にはかならない。

これに対するチザムの反論にはおよそ二つのポイントがあった。一つは信念の本性にかんする一般的仮設にふれるもの、二つはスレイの推論が不条理に陥る、という点である。先ずはじめの点についてチザムはこう述べている。

なにかある個物的事物 x にかんして、 x がある特性 F をもつ、と信じることは、少くとも一部分、 F であるような x が存在すると信じることである。また若干の S が P である、と信じることは、 S でありかつ P であるような x が存在する、と信じることである。さらに一般的に述べれば、なにか個別的事物にかんして、いやしくもなにごとかを信じることは、ある特性にかんしてこの特性を例証するなにもものかが存在する、と信じることである⁵⁹⁾。

もとよりこの仮設が認められれば問題の含意は成立つだろう。ED: $(\exists x) S \text{ believes that } Fx$. から EC: $S \text{ believes that } (\exists x) Fx$. をみちびくことを、この仮設はよしとしているからである。なるほど理論的に中間子の存在を予想した物理学者は、中間子なるものがある特性をもつことを信じた、といっていいかも知れない。ところでもしそうならかれは、中間子の存在を信じなくてはならぬのだろうか。これは大いに疑わしい。事実と反する仮想として雪男の存在を語る生物学者が、もしも雪男がいるとすれば、それはかくかくの性質をもつであろう、と信じることはあるだろう。しかしこの学者は雪男の存在をてんから信じていないのである⁶⁰⁾。この仮設は〈信じる〉ことの論理として披露されているが、しかしその実体はすでにチザム自身が拒んだ語用論的な素姓のものと思われる。

次に、スレイの推論が誤謬にはかならぬ、というチザムの批判をみておこう。チザムによると、EDをみちびくさいスレイは以下の段どりでなされる推論に拠っているという。

(前提1) S は G が F であると信じている。

(前提2) G と同一であるような x が存在する。

(ED) したがって、 F である、と S が信じているような x が存在する。

S を「アメリカ人の愛国者」、 G を「火星へ初めて降り立つ宇宙飛行士」、 F を「未来の合衆国大統領」とせよ。前提1は愛国の情のしからしめる発言だと解することができる。とこ

ろが案に相違して、火星の土地を踏んだ最初の間が、こともあろうに白ロシア共和国はミンスク出身の婦人だった、としたらどうだろう。前提2はたしかに真である。しかしEDは偽ではないだろうか。そのロシア人女性が、アメリカの愛国者によって未来の大統領と目された当人であるなどと言えようか⁶¹⁾。——このようなチザムの反論は、しかし、うけとれないだろう。奇妙であるのは上の推論ではなくて、可能的宇宙飛行士を頭からアメリカ国籍の者に限った愛国者の信念のほうなのだ。とはいえ、信念はつねにそうした視野の狭窄をもちまえとする、と言うのが正しいだろう。

(iii) スレイはパターンIが、意味関与的接頭辞 *semantical prefix* に適合することを示した⁶²⁾。この種の接頭辞はただちに心理的なものとは言いがたいから、この事実は、問題のパターンが指向性の十分条件を表示しないことを告げている。さて、パターンIとIIとのちがいは、一つに、合理性原理によって前者に含意の箇所が増えているという点にあった。したがって、スレイの指摘はある意味で、I、IIをひっくり返して既知のパターンが指向性の標識ではありえないことの指摘に匹敵するのである。

これにたいしてチザムは、意味関与的接頭辞が実のところ装われた指向的接頭辞にほかならぬ、と反論している⁶³⁾。簡単にかれの主張を繰り返しておこう。すなわち、文について、それがなにごとかを「表現する」「述べる」などと語るのはたんなる言葉の綾である。実はそれは、ある人がこの文を使ってある命題を「表現し」、「述べる」ことを言うのだ。そしてある人が命題を表現するためになにごとかをなすと述べることは、明らかに指向的な言明でなければならない⁶⁴⁾。——こうしたチザムの見解には、指向性をめぐる議論の新たな展開の跡がみとめられる。文の含意関係の観察によって指向性という論理的性状を調べようとする従来の方法から、いまや、文表現の主体への言及、文使用の条件への考察へと探索がおよぼうとしているのだ。私たちは、この稿のはじめにも断ったように、後ほど、もっぱらこの部面を取りあげて論じる予定でいる。そこで、ここではただ問題の指摘にとどめておきたい。

パターンの考察はかつてのT3の不備を改善しようとする意図にでたものだから、はじめからその他の指向的表現は適用範囲外に置かれたままである。この意味でもパターンは指向性のたんなる十分条件にすぎない。それでも、多くの動詞は目的語をとるのと名詞節をしたがえるのと二役を兼ねるので、この種のパターンが実用の面でそれほど懦弱なわけではない。しかし *love*, *worship* などにはお手あげであろう。

指向性の基準 その3

スレイとの応酬のうちに、チザムは指向性チェックのためのまた別の基準を示した。私たちの調べるこの最後の基準は、パターン表示が挫えるかも知れないとしてもまだこれがある、という触れこみでいわば裏中から取りだされたものである⁶⁵⁾。それは次のごときである。

(a) 文接頭辞 M は、もしもあらゆる文 p にたいして、 $M(p)$ が論理的に偶然であるならば、指向的である。

(b) 文は、もしも指向的接頭辞によってえられる文を含意するならば、指向的である。

この基準を実地にもちいる前に、チザムは格別言及してはいないが、〈論理的に偶然〉について、一言、注を加えておこう。文 p が偶然である、とは、この文が必然的に真でもなければ、また、 p が真であるような事態が不可能でもない、ということにほかならない。したがって、指向的でない文接頭辞には、必然的に真である文もしくは必然的に偽である文を作りだすものが含まれる。さて、実際にこの基準をためしてみよう。たとえば、「…は不可能である」 *it is impossible that* は指向的ではない。というのは、いまこれを「若干の四角形が円である」にかぶせれば、「若干の四角形が円であるのは不可能である」という、必然的に真なる文をえるからである。これにひきかえ、「 S は……と信じる」 *S believes that* を代表格とする心理的な文接頭辞は、これをどのような文に先立たせても、たんに偶然的な文しか生まないように思われる。たとえば、「 S は若干の四角形が円であると信じている」という文は、 S のもつ信念にかんして、経験的にその真偽を確かめるしか術のないことがらを語っているのである。

ところで、第三の基準もやはりいくつかの問題を免れえないのだ。まずもって、見本の文接頭辞が生む文が必然的に偽である——チザムの言いかたと〈矛盾する〉 *contradictory* ——という判定に、首尾一貫した理由が示されていないことが問題である。たとえばチザムによれば次の文、

法を遵守してはならぬことが法的義務である。

(It is legally obligatory that they shall not observe the law.)

は〈矛盾する〉から、したがって、接頭辞「…は法の義務である」 *it is legally obligatory*

that は指向性をもたないのだという。もとより、この文には矛盾が含まれているだろう。しかし基準(a)の語る意味で、この文が〈偶然的でない〉言いかえれば、〈必然的に偽である〉かどうかについては係争の余地があるだろう。一方で、この種の文が、たんに偽であるにすぎないのではないか、という疑いが残る。言うまでもないが、必然的に偽である文は、また、偽なる文でもあるけれども、逆に、偽である文は必ずしも必然的に偽であるわけではない。また別に、この種の文は真とも偽ともいえない、言いかえれば、真理値をもたないのではないか、とも疑われる。いずれにせよ、この種の文に下されたチザムの〈必然的に偽〉という判定は、決して自明なものではない⁶⁶⁾。もちろんこの問題をすりぬける便法があるにはある。そうするには基準の(a)項に補正をほどこして、こう言いあらわせば足りる。

(a') 文接頭辞 M は、もしもあらゆる文 p にたいして、 $M(p)$ が論理的に偶然であるか、あるいはパラドクスではないのならば、指向的である。

ところで、この補正とは無関係に、接頭辞を構成するのが認識動詞である場合にはやはり不都合が生じる。すなわち、この基準は指向性の必要な要件ではありえない、という不都合である⁶⁷⁾。たとえば、

S notices that p and $\sim p$.

が真であれば、ここから含意 p and $\sim p$ が取りだされるだろう。ところでこれは必然的に偽なる文にはかならない。そこでもなお基準を温存しようと思えば、二つの可能性しかない。一つは、一般に認識動詞を心理的な動詞とは別扱いにして、これに指向性を認定しないこと。もう一つは、ここで基準を再び手直しすること⁶⁸⁾。それには次の付則を(a')(b)につけ加えれば十分である。

(c) ただし p は分析的に真である文、恒真文、分析的に偽である文、恒偽文、もしくはパラドクスを内包する文でないものとする。

しかし、まだ問題の根が断たれたわけではない。知を愛し求めた(したがって、知ということがありえるかどうか、なにごととも含意しなかった)哲学者ソクラテスは、次のような意味のことを広言することをもって、自らの徳とした、と言う。

ソクラテスは、自己がなにも知らないということを知っている。

(Socrates knows that he knows nothing.)

この文は項目(c)に違反していない。ところで、この文が真であれば、ソクラテスは少なくとも一つのことを知っているのである。すなわち、ソクラテスはなににも知らない、ということ。しかし、もしもそうであるなら、ソクラテスはなにひとつ知らないのであるから、この文は偽にほかならない。ここには明らかにパラドクスがかもされており、(a')によって、S knows that といった文接頭辞は指向性をもたない、とされてしまうのである。もちろん、このようなパラドクスがたんにこの例にとどまるという保障はどこにもないのだ。こうしたパラドクス自体をどう解くかは別の問題として、少なくとも、チザムの言う広い意味での〈矛盾〉は、少くない数の心理的接頭辞を非指向的なものに仕立てあげるだろう。

ここで、付則の追加によりこうした困難をしのごうという着想が浮ぶかも知れない。たとえば、

(d) p の要素には、 M の要素と短絡するものを含んではならない。

ここで〈短絡する〉と称されたことがらを相当程度精確に述べることは可能だろうが、今それは棚上げしてもよい。大雑把に言えば、 M の動詞部分が p にそのままの形で、またはその同義語に身をやつして、登場することを禁じたいのである。ところが不幸なことに (d) は (a') の主旨に真向から背く。つまり付則 (d) は、パラドキシカルな文を締めだす効き目の強力すぎる結果、好ましくない接頭辞の多くに指向性を付与するという仕儀に立ちいたるのだ。たとえば、もはや「…は間違っている」といった非心理的接頭辞に指向性を無下に拒否しえなくなる。

そもそもそれが間違っている、と真実に言いうるようなものごとにはなに一つない、ということとは間違っている。

(It is wrong that there is not anything of which it can be truly that it is wrong.)⁶⁹⁾

このようにして、私たちの見るところでは、第三の基準も、チザムの触れ込みとは異り、決して満足すべきものではないと言わざるをえないのである。

結語にかえて

以上で指向性の基準の点検をあらまし終えたこととする。なお考慮しなければならない問

題は多く残されているが、ここまでで明らかになったところと、また、本文中で言及の機会がなかったが、しかし逸してはならない一、二の点を述べることで、ひとまず本稿を締め括りたい。

チザム・テーゼはいまだ実証されてはいない。なぜなら、チザムの提示した数々の〈指向性の指標〉は決してその名に値しないことが、これまでの検分によって明らかだからである。それにもかかわらず、このテーゼは、証明は欠いているものの、しかし私たちの直観によく合致する一つの〈予想〉としては依然有意味だろう。なんといっても私たちは〈心〉もしくは〈心理現象〉についてある種の〈理解〉をすでにたずさえている。たとえ、それが終始一貫した、絶対的に明確な限定をもってはいないとはいえ、心あるものにはそれにふさわしい、心ないものにはまたそれなりの、多少なりとも定形をもつ〈態度〉を、私たちは、事実、とっているのだ。チザムの試作した指向性の基準の数々は、この態度のうちに生きられた〈理解〉をいくつかの角度から浮彫りにする。それと同時に、チザムの試みは、この理解に適合し、この理解をみだしている〈心〉の輪郭を、いわばまだ焦点距離の微調整が施されていない顕微鏡で覗くかのように、私たちに垣間見させてくれているのである。さらにどのような調整を加えたらよいか、これは残された課題だろう。

すでに言及したように、指向性に関与する個別的言語事象への観察をいっそう行きとどかせる必要がある。しかしそのさい、あれこれの事象を文脈ごとに取り上げて別個に分析するだけでは足りないだろう。こうした細部の観察が必要なことは言を俟たないが、しかし同時に、指向性なるものを全体として処遇しうる洞察をふまえ、そしてそれに裏打ちされた形式的考察が是非とも入用である。チザムの試行は、この点で、自然言語の微妙な含蓄をなおざりにしない長所をもつものの、半面、心の単一な模型の製作を怠っている。言いかえれば、たんなる言語分析の不十分さを、構成的方法によって補わねばならないのだ。ここに、チザムの方法の特異さが認められるが、これと並んでもう一つ、その方法にかんして簡単ながら詮議しておきたい点を次に述べよう。

チザムの指向性にかんするテーゼが、外延性原理に対抗しつつ、その否定的な裏がえしとして呈示されたことにはすでに触れた。外延性原理とはある自明でない事態を可能なかぎり明示しようとする企図にそうものである。この順序は逆ではいけなかったのだろうか。指向的言語を積極的な原理によって確保しておき、そののちに外延的言語を、前者の消極的な一形態として構想することも自由ではなかったか。しかし、このようなパースペクティブの転倒を封じる事情がチザムにはあった、とみるのが妥当である。指向性は、チザムにとって指向性原理といったものをわざわざ労苦を払って明示するには余りにも自明なことではなからうか。非外延的なものとは一箇の自明事である。ところが、時間についてアウグスティヌスが述べたように、この自明事を、あらためて、どのようなものか言うだんになる

と、換言すれば、それを明示しようと試みると、途端に私たちは、なにごともしらない無力な自己を見出すのである。こうしてチザムは終始指向的なものの〈明証〉へ帰趨しようとする。この思考の方向はチザムにとって修正不可能なものである。ところで私たちはここで、このような思考の道行きを阻止すべきこと、チザムのもつ明証に〈解釈学的還元〉が施されるべきことを提案する。心理現象は私たちに余りにも親しいが、だからこそ、それ自体よそよしい、一箇の不明事と化すべきである。チザムは哲学的行動主義や新実在論の外延主義的見地に自らの確保する明証を対抗させつつ、やすやすと凱歌を奏したが⁷⁰⁾、この哲学的勝利は奇妙な空しさにみちている。外延的なものでもって外側から指向性を囲いこみ、この外被のうゑにその固有な形を露わにしようとする努力は、こうした一切の企図に先行する本源、自明性の目前であえなく挫えてしまう——依然として不明でありつづけるただ一つのことを残したまま。この形なきものこそ、実際、指向的なものにほかならない。むしろ私たちは方法的外延主義に立つべきだろう。ここから可能なかぎり、非外延的な、心理なるものへ達しようとするのが、かえって、心における独自固有なもの——そんなものがあるとして——を明示する所似だろう。

〔註〕

- 1) Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, 1874, Bd. I, II Buch, I kap., § 5.
- 2) フッセル Husserl が、師ブレンターのテーゼに学んで、意識の基本構造として指向性 Intentionalität をあげたことはよく知られている。手近かに見出される各種の哲学辞典は、この項目のもとに例外なく二人の名を挙げているが、指摘の点については揃って口をつぐんでいる。しかし、このような形で流布された指向性概念が決して意識の特性を捉えていないことに、再度注意しておこう。意識がつねにあるものについての von 意識である、たとえば視るというのはなにかを視ることだし、評価することはあるものについて評価することだ、というなら、ボールであれ小石であれ、蹴られるものなしに蹴ることなどではいけない、という点では、こうした物理現象—ただし「申し出を蹴る」というのは比喩にほかならない—も指向性をもつことになる。Anthony Kenny, *Action, Emotion and Will*, 1963, p. 195 にこの指摘がある。また Jenny Teichman も指向性に (i) 対象へのさしむけ、(ii) 内容への関与の二部面をはっきり分け、(i) が心理現象の十分条件では（そして必要条件ですら）ない、と述べた。この区別はブレンターノからの引用中に暗示されている。cf. *The Mind and the Soul*, 1974, ch. 7.
- 3) 誤解のおそれがないかぎり、以下ではたんに〈指向性〉と言う。したがってこの用語は少くとも両義的である。心理の指向性と言語のそれと。
- 4) Roderick M. Chisholm, 'Sentences about Believing' in H. Feigl et al. (eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. II, 1958. Reprinted in A. Marras (ed.), *Intentionality, Mind, and Language*, 1972 p. 35. 以下、この書目を略号 IML で示す。
- 5) *Ibid.*, p. 36. 別の箇所でチザムは、指向性にかんするブレンターノの主張が、存在論的と心理学的と、二つの領域にわたることを指摘している。言語の指向性テーゼは、後者に接続するものである。Cf. Chisholm, 'Intentionality', in P. Edwards et al. (eds.), *The Encyclopedia of Philosophy*, 1967, vol. 3, p. 201. 以下で略号 EP を用いる。
- 6) このような形で問題設定は次に拠る。cf. Bruce Aune, 'Thinking' in IML (From *id.*, *Knowledge, Mind and Nature*, 1967.), pp. 269f., p. 276.
- 7) Chisholm, 'Intentionality', in EP, p. 203.
- 8) 以下の基準は、チザムのものをコーンマンが補訂したのをほぼそのまま採用した。Cf. James W. Cornman, 'Intentionality and Intensionality', *Philosophical Quarterly*, 12 (1962). Reprinted

in *IML*, pp. 53-54. この採用の理由は、この方が元のものより「指向性」の論理的素性について見通しやすい、という点にある。ただし本稿に掲げた基準はコーンマンのものに若干の変更を加えてある。なおチザムの基準の原形について '*Sentences about Believing*' in *IML*, pp. 32-35; '*Perceiving*', pp. 170-72 を参照。

コーンマンは別の所でもチザムの基準を同じ形で定式化している。'*Metaphysics, Reference, and Language*', 1966, pp. 28f. を参照のこと。なお本書では、言語的二元性が存在者の領域における二元性に対応する、というチザムの予想が批判されていることを申し添えておこう。

- 9) チザムらの考察は、言うまでもなく、英語をめぐるなされている。指向性の基準の定式にも、この事実は反映している(単文、複文、重文、名、記述などは一方では英語の文法カテゴリーに照応し、他方では論理学のカテゴリーに接続する。)したがって、本来ならば、この稿においても対象言語を一貫して英語で表示すべきであるが、以下では折衷に甘んじることとする。というのも、自然言語としての日本語にもチザムのいう指向性の形跡を疑うことができないのであって、私たちの関心は、ある言語の厳密な意味論的記述よりもむしろ、一般に指向性なるものの論理的性状について洞察を加えることにあるからである。
- 10) 指向性 intentionality も、内包性 intensionality も語原はラテン語の動詞 *intendere* (=to stretch out) にある。intention 意図, intension 緊張, intensive 集中的; extension 拡張, 外延, extente 拡張 (＜L. *extendere*) など、対をなす一連の語の解釈学が試みられれば当面する考究に裨益するだろう。
- 11) Cf. Russell, *Inquiry into Meaning and Truth*, 1940, Peuguin Books, Ch. 19. Extensionality and Atomicity; Cornman, '*Intentionality and Intensionality*' in *IML*, p. 56.
- 12) コーンマン前掲論文を参照。気付かれる点を述べれば、E2 は重文をかかえこんだ複文にも適用されるから、厳密に言う、T2 が E2 の否定と同じ、というのは十分ではない。例、It is necessarily true that if S is P, then S is Q.

コーンマンで不十分な点は別にもある。(それゆえ私たちは、コーンマンの言わない「ある意味で」を叙述に加えた。)というのは、E2 は分子文の真理値に言及している。したがって、外延性原理がもたら文の＜記述＞という働きに密着する立場たることがここに示されている。ところが T2 は分子文(複文の平叙文)についてだけ述べ、それが真理値をもつ、とは前提していない。言いかえれば、E2 の否定と T2 とは、前者が文をアリストレスのいわゆる *apophantikos logos* に制限する点で区別されるのである。

- 13) Cf. Susan Haak, *Deviant Logic*, 1974, Ch. 7. Singular terms and existence, p. 126.
- 14) I look for Mr. So-and-so. という文で、Mr. So-and-so が実在の人物の名だとせよ。この文からも、やはり、Mr. So-and-so exists. をみちびくことはできないのだ。知らないことであつたが、すでに問題の人物は死亡していた、とも考えられるからである。しかしこの文の使用の場面で、話し手と聞き手との間に、Mr. So-and-so が実在する人の名であることについて了解がついているならば、この文(の使用者)が Mr. So-and-so exists. を＜前提している＞と言えるかもしれない。しかしこの前提の論理は標準的な論理学とは別の体系を要求する(たとえばそれは文に場合により真偽以外の値を割りあてる体系である)。T1 が＜前提＞という論理的関係となじまないことについては次に指摘がある。Cf. J. O. Urmson, '*Criteria of Intentionality*', *Proceedings of the Aristotelian Soc. Supplementary* 42 (1968). Reprinted in J. M. E. Maravcsik (ed.), *Logic and Philosophy for Linguists: A Book for Readings*, 1974, p. 227.
- 15) Cf. *infra* p. 11f.; *ibid.*, pp. 56f.
- 16) Cornman, *IML*, p. 60.
- 17) グッドマンはこう指摘した。「ある意味で「反事実文の問題」という呼称はミスリーディングである。なぜなら問題は、ある言明がたまたまとった表現形態とは独立だからである。」(N. Goodman, '*The Problem of Counterfactual Conditionals*', *Journal of Philosophy*, 44, no. 5 (1947), pp. 4f.) 類似の指摘は R. Stalnaker, '*A Theory of Conditionals*', in N. Rescher (ed.), *Studies in Logical Theory*, *American Philosophical Quarterly*, Monograph Series, No. 2, 1968, p. 66, n. 3 でもなされている。
- 18) Cf. Cornman, *IML*, p. 62; Kenny, *op. cit.*, p. 198; Urmson, *op. cit.*, p. 231.
- 19) マラスは T1 が「狭すぎる」too restrictiv ことを認めて、条件を付加することによって T1 を生かそうと試みた。Cf. A. Marras, '*Intentionality and Cognitive Sentences*', in *IML*, pp. 66-74. Reprinted from *Philosophy and Phenomenological Research*, 29 (1968).これについては cf. *infra*

- p. 12. なおチザム自身はその後この種の文の救助に首尾をとげてない、と思われる。
- 20) コーンマンはこの道を選んだ。かれはライルの唱えた task verbs / achievement verbs の区別 (cf. G. Ryle, *The Concept of Mind*, 1949, pp. 130ff.) をうけいれて, cognitive verbs が後者に属すること, それが決して心的活動 mental activity をあらわさないことを述べた。指向性こそ心的活動の特徴を示すものである。したがって, cognitive verbs は指向性を含蓄しないのだ (IML, pp. 63f.)。この論点は別に検討が加えられるべきであるが, 私たちはコーンマンに同情しう理由をもつこと, この点にかんするマラスのコーンマン批判 (op. cit., pp. 70ff.) に理由がないことを, ここで申し添えておきたい。
- 21) Chisholm, IML, p. 35. n. 5. もう一つの例: The dam is high enough to prevent any future floods. これは次にある。EP, p. 203. ちなみにチザムはさまざまな例外を一挙に斥ける道具だてを案出していない。
- 22) Cf. Kenny, op. cit., p. 201.
- 23) この問題は, 直接目的語をとる認識動詞の場合と平行する。註(19)を参照。ハルトナクは know を使用する条件を語用論的に探究した。かいつまんでいうと, know を使用するのは話者の信念 belief が疑念に晒された場面でのことであり, I know と述べることは, 疑念の挑戦を斥ける働きをする, know と believe とに含意関係はない, ただし, know は believe を <前提する> presuppose というのである。Cf. Justus Hartnack, 'Some Logical Incongruities between the Concept of Knowledge and the Concept of Belief', in Munitz et al. (eds.), *Language, Belief and Metaphysics*, 1970. この示唆は主題的に検討するに足るものである。
- 24) この種の文はそもそも真偽とは縁がない (法律は正しくもあれば, 苛酷だったりもしよう。しかし法律が真である, と述べることは奇妙である) から, こうした扱いは不当だ, と言うのはあたらない。T2 はまさしくこのような扱いだけを許容する外延性原理の否定なのであって, T2 を点検する文例としてこの種の文は立派に資格をもつ。註(12)を参照せよ。
- 25) T2 に合致する義務様相文 deontic sentences および意味にかかわる文 semantic sentences の例を Urmson (op. cit., p. 232) が, 前者についての言及を Marras (op. cit. p. 69, n. 6) が, それぞれを与えている。意味にかかわる文が, 「指向性」をもつことをチザムは弁護している。(ただし, そのときの話題は今問題にしている四つ組の基準とは別である。cf. *infra* p. 25.)
- 26) Cf. *supra* p. 8.
- 27) Cf. Kenny, op. cit., p. 198.
- 28) *Ibid.*
- 29) entail を仮に<伴意する>と造語して訳した。文 S₁ が文 S₂ を伴意するのは, 次の含意関係が成立つときのことである。S₁ が真なら S₂ は真。S₂ が偽なら S₁ も偽。S₁ が偽なら S₂ の真偽不定。
- 30) マラスは (1) を両義的に捉える仕方がクワインの言う指向性をおびた動詞の両義性, すなわちその<関係の意味> relational sense と<観念の意味> notional sense の区別 (Cf. W. V. Quine, 'Quantifiers and Propositional Attitudes', in *The Ways of Paradox and Other Essays*, 1966) の転用であることを述べている。Cf. IML, p. 68, n. 4.
- 31) このような見地は他の認識動詞にたいしても有効である。たとえば (1) a remembers b. において a は個人の名, b は記述の略号であるとしよう。T1 にこの文は合致しない。T3 はどうか。今 (2) b=c を真であると仮定する。c も記述の略号である。代置によってえられる文 (3) a remembers c. は元の文の真理値を変えないと思われる。ゆえに元の文は T3 に合致しない。ところで, 元の文は (5) a remembers who b is. を伴意するとも解することができる。はじめの解釈では記憶は<再認>を言う。すなわち, 与えられた情報をすでにもつことが検索されるのである。後の解釈では, 記憶は<想起>を言う。想起は必ずしも情報が外から与えられることを要さない。このとき (6) a remembers who c is. は元の文の真理値を変える。したがって, (1) が (5) を伴意するかぎりにおいて (1) に合致するのである。
- 32) 'Rejoinder' to Sleigh's 'Comments', in Hector-Neri Castañeda (ed.), *Intentionality, Minds, and Perception*, 1967, pp. 47f. 以下略号 IMP.
- 33) 両義性のテストにかんしては次を参照せよ。R. M. Kempson, *Semantic Theory*, 1977, § 8 Ambiguity and vagueness.
- 34) 四つ組の基準の呈示したとき, チザムは intensionality と intentionality との区別にどこまで自覚を深めていただろうか。むしろ physical / psychological の言語的二元性を確信するあまり, 上の区別はばやされているように思われる。それはたとえば, チザムが T1, T2, T3 は相当程度

重複していて、おそらく T3 をもって他の二つの働きを兼ねさせることができるだろう、との見込みを漏れていることから推察できる。Cf. *IML*, p. 34, n. 3.

35) Chisholm, *EP*, p. 204.

36) このような分析は伝統的な意識概念を想起させる。たとえばサルトルは、意識が対象についての定立的意識 *conscience de quelque chose* であると同時に、自己についての非定立的意識 *conscience (de) soi* でなければならない、と述べている (*L'Être et le néant*, 1943, p. 20.) かれの「痛がっている」という事態は、痛みなる、意識をこえた状態を明らかに狙うと同時に、この状態へさしむけられている自己についての暗々裡の意識なのだ。言いかえれば、痛がっていることに(暗々裡に)気づいていなくては、人は痛がることをなしえない。さて、例文にもどろう。元の文に含意された文は、その要素として元の文そのものを含んでいる。ここに問題はないだろうか。He is in pain. が He is aware that he is in pain. を含意するとすれば、後者はまた He is aware that he is aware that he is in pain. を含意し、かくして無限に至るのではないだろうか。これこそサルトルが次のように述べているところなのである。意識の自己についての意識を定立的な意識、言いかえれば、意識についての認識という形で捉えてはならない。自己意識 *conscience de soi* の構成にそのような、認識するもの *connaissant* / 認識されるもの *connu* という二元性をもちこむただちに無限の連鎖に巻きこまれざるをえないからだ。したがって、自己意識は無媒介的關係 *rapport immédiat* を具えている、と解さねばならぬ (*ibid.*, p. 19)。——しかしこの無媒介性がいかなる論理的本性のものか曖昧なままである。

37) *IML*, p. 32 に「『指向性』は心理的なものの標識 *a mark* である」とあるが、これは言語の指向性そのものではない。明らかに、*IML*, p. 83 に言語的な意味における「指向性の標識」*a mark of intensionality* について語られている。不定冠詞 *a* に注意。また、〈基準〉の意味について *IMP*, p. 49 を参照。

38) 指向性テーゼの(2)をみると (*supra*, p. 3), 「ある心理現象 *certain psychological phenomena* を記述しようと望むならば——とくに、思考……などを記述しようと望むならば……」とある。これはあたかも、心理現象でありながら非指向的な言語で記述しうな部類を認めたような言い方である。しかしこれが、ブレンターノ・テーゼの改訂版を企てるチザムの本意に背馳することは明らかである。この措辞はむしろ、チザム手作りの基準を念頭に置いた発言と聞くべきだろう。

39) Teichman, *op. cit.*, p. 93.

40) この〈作用〉の夢想に、錬金術が生い立つ。錬金術とはまさしく〈作用の夢想〉である。もちろん、これと関連して、伝統的な精神観が、精神、心を〈作用〉とみてきたことを想起すべきである。

41) 「砒素は人魚にとって毒である」は、〈前提の論理〉に従えば真偽不定。

42) Cf. アリストテレス『形而上学』第四巻、第三章、1005 b 20.

43) 類似の例を思いつくままあげる。「汚ない」「きれいだ」「ひどい」など。私たちは註(40)の観点をふまえた〈作用性の記号論〉を準備中である。これは、本節「擬似心理的なもの」の展開として読まれるべきものとなるだろう。

44) それは1962年12月 Wayne State 大学でのことである。カスターネーダの編著はこのシンポジウムで発表された論文、質疑応答の記録などをもとに成っている。

45) *IML* に所載。

46) *IML*, p. 83. Cf. *IMP*, p. 18.

47) 以下、本文で詳説されるように、この点についてチザムは論文(i)では二つの含意を是認していたが、スレイの批評によって論文(ii)にみる結論に訂正したのだった。Cf. R. C. Sleight, Jr., 'Comments', in *IMP*, pp. 36-45. 同じ点はルースによっても論じられた。Cf. D. R. Luce, 'On the Logic of Belief', in *IML*, p. 86.

48) かつてチザムはこう論じた。Cf. *IMP*, pp. 17-18.

49) *Ibid.*, p. 18.

50) Luce はこのような議論をほのめかしている。(Op. cit., p. 86.)

51) *IMP*, p. 12.

52) Cf. *IMP*, pp. 42-43. なおリカンはこの議論を承認している。Cf. W. G. Lycan, 'On "Intentionality" and the Psychological', in *IML*, p. 102.

53) Cf. 'Believing and Intentionality: A Reply to Mr. Luce and Mr. Sleight', in *IML*, p. 92.

54) Cf. *IMP*, p. 43.

55) Cf. *IMP*, pp. 49 f.

- 56) Cf. *supra*. p. 16.
- 57) *EP* に所収の論文でもパターンⅡが指向性の〈申し分のない〉satisfactory 基準として示されている(言うまでもないが、これは基準が指向性の〈十分な〉sufficient 条件である、というのとは異なる)。Cf. *EP*. p. 203.
- 58) Cf. *IML*, p. 93.
- 59) *IML*, p. 79.
- 60) チザムの仮設は、神の属性から神の存在をみちびく西欧中世の論法を想起させる。少くともその仮設は、〈信仰〉のダイナミズムをよく示している。
- 61) Cf. *IML*, p. 94.
- 62) 例、「『知覚すること』(チザム著)の31ページのさまざまな文によって表現された命題にかんしては、どちらかといえば……ということが蓋然的である」(*IMP*, p. 43.)
- 63) Cf. *IMP*, pp. 51 f. またこれに関連した議論として pp. 31 f. も参照にあたいする。: *IML*, p. 93.
- 64) *IMP*, p. 52.
- 65) 'Rejoinder' in *IMP*, p. 54. にでているが、1962年の精神哲学関連のシンポジウムの際すでにこれに考えが及んでいたかどうか不明である。というのも、この書の発刊は1967年で、この間、1964年に *IML* が刊行され、ここに所収の 'Believing and intentionality : A Reply to Mr. Luce and Mr. Sleight', にすでに同じ内容の提案があるからである (p. 95)。また *EP*, p. 203 にも同じ基準が〈申し分のない〉ものとして掲げられている。
- 66) 私たちの抱く疑義は、この種の文がいわゆる〈意味論的パラドクス〉 semantic paradoxes に酷似するという印象に基いている。パラドクスの解法は、しかしながら、一様ではない。Cf. Susan Haack, *Philosophy of Logics*, 1978, ch. 8, Paradoxes.
- 67) リカンの指摘による。Cf. *Lycan, op. cit.*, p. 105.
- 68) リカンはこれを示唆している。Cf. *ibid.*
- 69) これはチザム自身の例。Cf. *IML*, p. 96. 別の箇所でこれと対照的な例が上げられている。すなわち「そもそもそれは正しい、と真実に言うようなものごとにはなに一つない、ということは正しい。」(*EP*, p. 203.)
- 70) Cf. Chisholm, 'Sentences about Believing', in *IML*, pp. 38 ff.

On the Intentionality (1) —An Examination of Chisholm's Thesis—

TATEKI SUGENO

Traditionally the term "intentionality" was used to designate a distinguishing trait of mental as distinct from physical phenomena. It is widely known that in nineteenth century Franz Brentano reintroduced the term into philosophy in order to define mental phenomena.

Roderic M. Chisholm tries to uphold the same philosophical tradition, but by different means. He maintains that we must use language which is "intentional" when we wish to describe certain psychological phenomena while we do not need to use such language when we describe non-psychological ones. If this view, which we will call "Chisholm's Thesis", is well-grounded, then physicalism has no reasons, because the former implies linguistic duality, whereas, according to the latter, the language of physics can be the universal language of science. Chisholm makes it his next step to establish some criteria of linguistic intentionality so as to substantiate his thesis. We'll examine among others three types of criteria invented by him.

First type of criterion :

(i) Let us say that a simple declarative sentence is intentional if it uses a substantival expression — a name or a description — in such a way that neither the sentence nor its contradictory implies either that there is or that there isn't anything to which the substantival expression truly applies.

(ii) Let us say, of any noncompound sentence which contains a propositional clause, that it is intentional provided that neither the sentence nor its contradictory implies either that the propositional clause is true or that it is false.

(iii) A third mark of intentionality may be described in this way. Suppose these are two names or descriptions which designate the same things and that E is a sentence obtained merely by separating these two names or descriptions by means of "is identical with". Suppose also that A is a sentence using one of those names or descriptions and that B is like A except that, where A uses the one, B uses the other. Let us say that A is intentional if the conjunction of A and E does not imply B.

(iv) A compound declarative sentence is intentional if and only if one or more of its component sentences is intentional.

(Cf. *Perceiving : A philosophical Study*, 1957, pp. 170-72.)

First of all we try to make it clear that a set of criteria cited above takes the negative forms of some principles on which so-called "classic" logic relies. Among them the principle of extensionality states that (a) any molecular sentence is a truth-function of atomic sentences that constitute the molecular sentence and that (b) Leibniz's Law holds for any elements of any sentence. Now the negation of (b) is identical with (iii). This indicates that (iii) is a sufficient condition of *intensionality* (not intentionality) because (b) is a necessary condition of sentences' being extensional. In the same way, (ii), too, is a sufficient condition of intensionality. But how about (i)? The criterion (i) has no direct relation with the principle of extensionality. The fact is that (i) is the negative form of a rule in classic logic, that is, "existential generalization".

We interpret our findings as a proof that what Chisholm calls "intentionality" is epistemologically founded on *Evidenz*, in other words, that intentionality has such an implicit and obvious nature as to resist being reduced into the extensional which are explicit but hard to understand.

In the second place we indicate some results of our examination of the above criteria. With respect to (i) : cognitive sentences i.e. sentences which contain cognitive verbs such as "know", "see", etc. become non-intentional. Now we have the alternative of accepting such a result or of taking (i) not to be a *sine qua non* of intentionality. In addition, (i) is not a sufficient condition of intentionality. E.g. "Potassium cyniade is poisonous to a living organism." Note that this sentence has no implications concerning the extension of "a living organism". With respect to (ii) : cognitive sentences become problematic in the same way as with (i), and we have the same alternative. Further, (ii) is not a sufficient condition of intentionality. E.g. "It is illegal in Japan that automobiles pass on the right side." Lastly with respect to (iii) : this is not a sufficient condition of intentionality because it is well-known modal sentences, whether psychological or not, make "referentially opaque" context. In addition, it is doubtful (iii) is a necessary condition of intentionality. There exists a counter-example given by J.M. Cornman. Consider "John is thinking of Alaska." If we substitute "the largest state of the United States" for its extensionally equivalent "Alaska", this will not change the truth-value of the sentence.

This counter-example may be a subject of discussion because the sentence seems to be ambiguous, or to speak more correctly, unspecified in regard to its meaning. In one specified meaning the counter-example may hold good. But in another specified it may not. It is regrettable we have yet little knowledge about such the relations of entailment as intentional expression have each other.

Chisholm has noticed that (iii) is not able to distinct intentional sentences from

other modal ones and proceeds to give two other criteria in order to make a clear distinction. First, Chisholm proposes the method which consists in observing the logical behavior of modal prefixes in contexts of quantification. Let M be some modal prefix, and four types of forms may be distinguished. UC : $M(x)(\phi x)$, UD : $(x)M(\phi x)$, EC : $M(\exists x)(\phi x)$, and ED : $(\exists x)M(\phi x)$. The following table states briefly Chisholm's findings concerning the prefix "S believes that". A "+" at the intersection of a column and a row indicates that the sentence at the head of the column entails the sentence at the left-hand side of the row. (A "(+)" indicates a trivial case.) A "-" means that such an entailment does not hold.

Second type of criterion :

	UC	UD	EC	ED
UC	(+)	-	-	-
UD	-	(+)	-	-
EC	-	+	(+)	+
ED	-	+	-	(+)

He argues that no modalities which are obviously non-psychological conform to this pattern and concludes that the pattern gives us a mark of intentionality. (Cf. 'Notes on the Logic of Believing', *Philosophy and Phenomenological Research*, 24 (1963-64), pp. 195-201.)

With regard to this pattern, R. C. Sleigh entered into a controversy with Chisholm. Examining this dispute we may draw some conclusions as follows : (i) Sleigh has made clear that the pattern in question does not apply to not a few prefixes such as "S wonders whether", "S fears that", etc.. In effect, the pattern represents nothing but a sufficient condition of intentionality. Although Chisholm did agree with him when the pattern caused controversy, afterwards he, however, repeated the same pattern as a "satisfactory" criterion. In addition, Sleigh indicated that such prefixes as mentioned above are in agreement with what he calls "Minimum Pattern". This pattern, however, as Chisholm himself pointed out, may apply to non-psychological modal prefixes (e.g. "it is morally indifferent that"). Therefore a Chisholm cannot employ Minimum Pattern as another mark of intentionality. (ii) Sleigh argues that the prefix "S believes that" conforms to his Minimum Pattern, which is contrary to Chisholm's view. What Chisholm said in answer relies on those pragmatic hypotheses concerning belief expression which he himself rejected as useless for a logical analysis of intentional sentences. Thus we may conclude that the pattern is neither a necessary nor a sufficient condition for modal prefixes' being intentional.

Third type of criterion : Finally Chisholm proposes that a modal prefix M may be

called intentional if "for every sentence p , $M(p)$ is logically contingent."

('Believing and Intentionality : A reply to Mr. Luce and Mr. Sleigh.' in Marras, A.(ed.), *Intentionality, Mind, and Language*, 1972, pp. 95-96.)

Examining the last criterion, we notice that it is difficult to apply the criterion in question to various concrete examples because it remains uncertain which case of $M(p)$ is and which is not logically contingent. A lot of obviously intentional sentences (e.g. "Socrates knows that he knows nothing.") may be excluded from the class of intentional sentences, because it seems "contradiction" results from them, as the above example shows. It is very difficult to remove this difficulty by inventing some additional criterion. The reason is that this time such a criterion may approve many non-intentional prefixes as intentional.

After having examined three types of criteria, we may conclude that Chisholm has not succeeded in giving any satisfactory criteria of intentionality yet. If it is the case, we may say too, Chisholm's Thesis has no proof. Nevertheless all his endeavors were not in vain, because through them we come to see what is such a *Verständnis* as we have of mental phenomena. The logical behavior of these criteria, being in one respect fit for our understanding of mental phenomena but in another respect unfit for it, reflects the very *Verstehen* in certain vague form. In short, we understand intentional phenomena as what is, logically speaking, akin to intensional ones though it remains unknown to us how to make the distinction between them more precise.